

### (3) 河川利用及び河川環境の状況と課題

#### 1) ポンニコロ川

ポンニコロ川の水利用は、かんがい用水として利用されている。知事管理区間では、14件が利用されている。なお、これまでに渇水被害が生じた事例はない。

水質については、公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定はされていないが、平成22年に、水質調査を3地点で実施している。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）は、3地点いずれにおいても75%値で1.0mg/L以下となっており、AA類型相当である。

流域は下流から上流にかけて広く畑作地帯が広がり、耕作地を貫流するように流下している。

上流域は、山林が広がり、河川沿いにヤナギ低木群落が見られ、周囲にはトドマツ植林やエゾイタヤーシナノキ群落、落葉針葉樹植林等が分布している。

中流部は、オノエヤナギが散在するが一部山付けとなりミズナラ、エゾイタヤなども混生している。水際にヨシ類やミゾソバラが群落を形成し、オオイタドリなども混生している。

下流部は、オノエヤナギを主体とするヤナギ類が散在して分布している。水際にクサヨシ、ヨシ、ツルヨシなどのヨシ類やミゾソバから成る草本群落が分布している。魚類では、シベリアヤツメ、サクラマス（ヤマメ）、フクドジョウが主にみられ、秋にはカラフトマスやサクラマス等の産卵風景も見られる。

現況河道の河床幅は狭く、連節ブロックが河床まで布設されており一様な流れとなっているが、落差工下流に深みがあり流況に変化が見られる。既設落差工が23基あり、縦断方向の連続性がなく魚類の移動に支障があるため、遡上産卵区間も限定される。河道断面が一様であり、変化がない状況が見られる。

このような状況を踏まえ、サクラマス（ヤマメ）などの動植物の生息や生育・繁殖環境の保全、再生に努める必要がある。また、魚類等の縦断的な移動の連続性を回復する必要がある。



<サクラマス（ヤマメ）>

<ポンニコロ川 市道橋(SP214)より上流の河川環境>

## 2) ルクシニコロ川

ルクシニコロ川の水利用は、かんがい用水として利用されている。知事管理区間では、18件が利用されている。なお、これまでに渇水被害が生じた事例はない。

水質については、公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定はされていないが、平成22年に水質調査を3地点で実施している。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）は、3地点いずれにおいても75%値で1.0mg/L以下となっており、AA類型相当である。

流域は下流から上流にかけて広く畑作地帯が広がり、耕作地を貫流するように流下する。

上流域は、山林が広がり、河川沿いに牧草地、ハルニレ群落が見られ、周囲にはトドマツ植林やエゾイタヤシナノキ群落、下部針広混交林、エゾマツートドマツ群落、落葉針葉樹植林等が分布している。

中流部は、水際にヨシ類やミゾソバラが群落を形成しており、草本群落が主体となっている。

下流部は、オノエヤナギを主体とするヤナギ類が散在し、水際にクサヨシ、ヨシ、ツルヨシなどのヨシ類やミゾソバから成る草本群落が分布する。魚類では、フクドジョウやサクラマス（ヤマメ）が多く見られ、秋にはカワヤツメやサケ、カラフトマス、サクラマス等の産卵風景も見られる。

現況河道の河床幅は狭く、連節ブロックが河床まで布設されており一様な流れとなっているが、落差工下流に深みがあり流況に変化が見られる。既設落差工が26基あり、縦断方向の連続性がなく魚類の移動に支障があるため、遡上産卵できる区間も限定される。河道断面が一様であり、変化がない状況が見られる。

このような状況を踏まえ、サクラマス（ヤマメ）などの動植物の生息や生育・繁殖環境の保全、再生に努める必要がある。また、魚類等の縦断的な移動の連続性を回復する必要がある。



<ルクシニコロ川 如月橋より下流の河川環境>



<サクラマス（ヤマメ）>

### 3) 小石川

小石川では河川の水利用はされていない。

水質については、公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定はされていないが、優先整備区間では、令和元年に常呂川合流前地点で水質調査を実施している。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の75%値は2.0mg/L以下となっており、A類型相当となっている。

上流域は、河床勾配1/80以上の急な流れとなっており、河床は砂礫質となっている。河道周辺はカラマツの人工林や牧草地、畑地等であり、特に規模の大きい樹林帯では、エゾチッチゼミ等の主要な生息環境となっている。

中流域は、河床勾配1/135から1/75程度の砂礫河床でフクドジョウ等が生息している。現河道沿いにはヤナギ類を主体とした河畔林が帯状に分布しており、特に倒木や切り株から生える河岸のヤナギ小径木林は、ヤナギの幼木を餌とするエゾカミキリの生息地となっている。また右岸側には、ハルニレ等が林冠を構成しており、早春、林内ではフクジュソウの花を見ることができる。河道周辺のヨシ群落は、ルリイトトンボ等のイトトンボ類をはじめ、主に止水域に生息する昆虫類の主要な生息域となっている。市街地内を流れる河川ではあるが、河道内には水生植物のホソバミズヒキモが生育しているところもある。

下流域は、河床は砂礫から砂となっている。市街地内は暗渠の中を流れる区間であるが、開水路となっている常呂川合流点付近の水中には、砂礫河床を好むフクドジョウ等が生息しているほか、水際のヨシ群落内にはサクラマス（ヤマメ）、トミヨ、スジエビ等が生息しており、上流部に比べて魚類相は多様である。

また、地元住民が主体となった「小石川を守る連絡協議会」が河川管理者と連携して清掃活動を実施するなど、年々河川への関心が高まりつつあり、北見市が都市計画マスタープランに基づく「北見市東部地区かわまちづくり」計画を作成し、身近な潤い空間として河川緑地の整備・保全を行い、「かわ」と「まち」が一体となったまちづくりを実施している。

このような状況を踏まえ、エゾカミキリなどの動植物の生息や生育・繁殖環境の保全に努めると共に、「北見市東部地区かわまちづくり」計画と連携を図り、まちづくりに配慮した河川空間の創出に努める必要がある。



<エゾカミキリ>

#### 4) 無加川

無加川の水利用は、水道用水、工業用水及びかんがい用水として利用されている。知事管理区間では、6件が利用されている。なお、これまでに渇水被害が生じた事例はない。

水質については、公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定はされていないが、平成12年と平成13年に水質調査を5地点で実施している。調査結果によるとBOD（生物化学的酸素要求量）の75%値は、平成12年の調査結果は大富橋、武華橋で1.0mg/L以下のAA類型相当、滝の湯橋、相内橋で2.0mg/L以下のA類型相当、銀河橋で5.0mg/L以下のC類型相当、平成13年の調査結果は滝の湯橋、大富橋で1.0mg/L以下のAA類型相当、武華橋、相内橋、銀河橋で2.0mg/L以下のA類型相当となっている。

上流域は、山地が大部分を占め、エゾマツ、トドマツ等の針葉樹林が分布している。河岸には、水際までヤナギ類、ミズナラ、エゾイタヤ等からなる河畔林に覆われている。河床勾配は1/45程度で、比較的大きな礫や玉石の溪流には適度な落差と冷涼な地域を好むオショロコマが生息し、淵の底にはハナカジカ等が生息している。

中流域は、ヤナギ類やミズナラ等で形成される河畔林が連続して分布している。河床勾配は1/200から1/100程度で、河床は砂礫及び礫で、瀬と淵が明確な場所を生息環境としているサクラマス（ヤマメ）やエゾウグイが生息し、浮き石になっている河床は生息する魚類の産卵の場となっている。また、それらを捕食しようとするカワセミや水生昆虫を捕らえるカワガラス等が生息している。

なお、温根湯温泉付近は、川がせせらぎ、緑と一帯となった良好な景観を呈し、観光客の散策ルートや地域住民の憩いの場として利用されており、重要な観光資源の一つに位置づけられている。

下流域は、河床勾配 1/300 から 1/200 の比較的穏やかな流れとなっており、河床は砂礫、礫等となっている。

河道周辺はヤナギ類、ドロノキ等の河畔林が分布し、オシドリ等鳥類が生息している。また、河床にはスナヤツメ、フクドジョウ等の魚類が生息している。

東相内地区の無加川左岸高水敷では、パークゴルフ場等に利用されており、河岸の植生が回復されている所も見られるほか、右岸が山地になっているため、自然環境は良好である。

このような状況を踏まえ、サクラマス（ヤマメ）などの動植物の生息や生育・繁殖環境の保全に努める必要がある。

また、高水敷利用されていることから公園計画と連携を図り、公園と河川が一体化した河川空間の創出に努める必要がある。



<無加川 上流の河川環境>



<無加川 下流の河川環境>



## 5) 小町川

小町川では、水利用はされていない。

水質については、公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」による水域類型指定はされていないが、平成30年に6回の水質検査が実施されている。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）は、75%値で2.0mg/L以下となっており、A類型相当である。

上流域は山地が広がり、トドマツ植林やエゾイタヤーシナノキ群落、落葉針葉樹植林等が分布している。平地部では広く畑作地帯が広がっている。

中下流部は、河床勾配1/250から1/140程度となっており、河床は砂礫となっている。周辺は住宅街となっており、河道内にはクサヨシ、カモガヤ等が分布し、重要植物であるアカンカサスゲ、エゾキヌタソウも生育している。

水域ではサクラマス（ヤマメ）、フクドジョウが主にみられ、秋にはサケ、カラフトマスやサクラマスの産卵風景も見られる。

このような状況を踏まえ、瀬と淵の保全など自然環境に配慮した整備を行う必要がある。



〈小町川 小町川大橋より上流の河川環境〉



〈エゾキヌタソウ〉



〈フクドジョウ〉

## 6) パンケビバウシ川

パンケビバウシ川では、河川の水利用はされていない。

水質については、公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定はされていないが、上流、中流、下流の3地点で令和3年に2回、令和4年に2回水質検査が実施されている。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の75%値は上流では5.0mg/L以下のC類型相当、中流、下流では2.0mg/L以下のA類型に相当した。

上流域は、山地が大部分を占め、エゾイタヤシナノキ群落や落葉針葉樹植林が分布している。河床勾配は1/45以上の急な流れとなっており、河床は砂礫となっている。

中流域は河床勾配が1/190から1/70程度となっており、大部分が農耕地（畑）となっている。シラカンバ林、ヤナギ林やクサヨシ群落のほか、下流部の右岸側にはハルニレ林が成立しており、林内には重要種のチドリケマンやエゾミズタマソウが生育している。早瀬や平瀬が多いことから調査地点全域にフクドジョウが多数見られる。

下流域は河床勾配が1/250から1/160程度で、中上流に比べ緩やかな流れとなっている。ヤナギ林やオオヨモギ・オオイタドリ群落が成立しており、重要種のアカンカサスゲが生育している。早瀬の環境にはフクドジョウ、ハナカジカが見られ、落差工下の淵から下流の瀬の河岸部にかけては、サクラマス（ヤマメ）が見られた。

このような状況を踏まえ、サクラマス（ヤマメ）などの動植物の生息や生育・繁殖環境の保全に努める必要がある。



<パンケビバウシ川 つつじ橋より下流の河川環境>



<チドリケマン>



<ハナカジカ>

## 7) ペンケビバウシ川

ペンケビバウシ川では河川の水利用はされていない。

水質については、公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定はされていないが、平成15年7月に水質調査を上流と下流の2地点1回で実施している。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の75%値は上流の寿楽橋地点では1.0mg/L以下のAA類型相当、下流の紫苑橋地点では3.0mg/L以下のB類型に相当した。

上流域は、山地が大部分を占め、エゾマツ、トドマツ等の針葉樹林が分布している。河床勾配は1/45以上の急な流れとなっており、河床には、比較的大きな礫、玉石等となっている。

中流域は、河床勾配1/115程度となっている。河道周辺は、畑作、酪農が営まれ、河道沿いにはミズナラ、カシワ等の樹木群が分布し、西洋わさび等の植物も生育している。

下流域は、河床勾配1/115から1/170程度で、中上流に比べ穏やかな流れとなっている。周辺は温根湯市街地を形成する住宅街となっており、所々に畑地が見られる。河道内にはクサヨシ、オオヨモギ等が分布し、エゾオオヤマハコベも生育している。

ペンケビバウシ川は、上流域から留辺蘂幹線用水の20号排水路へと流下しているため、中下流域は、水量が少なく水深も浅いことから、魚類の生息環境として良好でない状況である。

このような状況を踏まえ、中下流域の水量を確保するなど動植物の生息や生育・繁殖環境の創出に努める必要がある。



<エゾオオヤマハコベ>



## 8) 訓子府川

訓子府川の水利用は、かんがい用水として利用されている。知事管理区間では、11件が利用されている。なお、これまでに渇水被害が生じた事例はない。

水質については、公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定はされていないが、令和5年に2回実施している。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の75%値は上流の仲の沢橋地点で2mg/L以下のA類型に相当、中流の中央橋地点では2mg/L以下のA類型に相当した。

上流域は、山地が大部分を占め、エゾマツ、トドマツ等の針葉樹林が分布している。河岸には、水際までヤナギ類、ミズナラ、エゾイタヤ等からなる河畔林に覆われている。河床勾配は1/145程度で、河床低下に伴い単調な流れとなっており、露岩が見られる。

中流域は、右岸側は丘陵地から続く山付き林の河畔林が連続して分布している。左岸側では畑作が営まれており河道沿いにはヤナギ高木林やクサヨシ等の草地が広がっている。河床勾配は1/160程度となっている。河床は砂礫及び礫で、瀬と淵が明確な場所を生息環境としているシベリアヤツメやハナカジカが生息している。

下流域は、河床勾配1/180程度と比較的穏やかな流れとなっており、河床は砂礫、礫等となっており、常呂川との合流点付近にはヤマメ（サクラマス）が生息している。周辺は、北見市街地を形成する住宅街となっており、所々に畑地が見られる。河道内にはクサヨシ、オオヨモギ等が分布し、アカンカサスゲも生息している。

このような状況を踏まえ、河道の連続性や瀬・淵等の生息環境を保全するとともに、水際から陸域、山付き部までの横断的な連続性にも配慮する必要がある。



<シベリアヤツメ>

<訓子府川 中央橋より下流の河川環境>

## 第2章 河川整備の目標に関する事項

本圏域における河川整備の基本方針としては、治水の現状、水害発生状況、河川の利用状況、河川環境の保全等を考慮し、北海道の川づくりビジョンに基づき、常呂川水系河川整備基本方針との整合を図りながら、河川整備にあたっての目標を明確にして、河川環境に配慮した治水、利水対策を推進することとする。

### 第1節 計画対象区間及び優先整備区間

本整備計画の対象区間は、圏域の北海道知事管理区間とする（表1-1）。このうち優先的に整備を実施する区間は、以下の通りである（表2-1）。

※ 「当面整備の予定のない区間」であっても、河川管理を行う上で小規模の改修を実施することがある。

表 2-1 優先整備区間

河川名	区 間	延 長
ポニコロ川	上流端：北見市北陽 松月橋 下流端：仁頃川への合流点	6.1km (2.3km 整備済)
ルクシニコロ川	上流端：北見市北陽 クトンニコロ川との合流点 下流端：仁頃川への合流点	5.6km (2.1km 整備済)
小 石 川	上流端：北見市東陵町 第18号橋 下流端：トンネル河川区間上流	1.6km (0.7km 整備済)
無 加 川	上流端：北見市留辺藪町大和国有林102林班 ぬ小班地先 下流端：相内川合流点（北見市美園360番地）	32.4km (21.9km 整備済)
小 町 川	上流端：北見市大正243番2地先 下流端：無加川への合流点	4.8km
パンケビバウシ川	上流端：北見市留辺藪町松山 門馬橋 下流端：無加川への合流点	4.3km
ペンケビバウシ川	上流端：北見市留辺藪町平里南1線 無名橋 下流端：北見市留辺藪町松山 西通橋	1.6km (0.1km 整備済)
訓 子 府 川	上流端：常呂郡置戸町字雄勝 仲の沢橋 下流端：常呂郡訓子府町字弥生 弥生頭首工	6.2 km

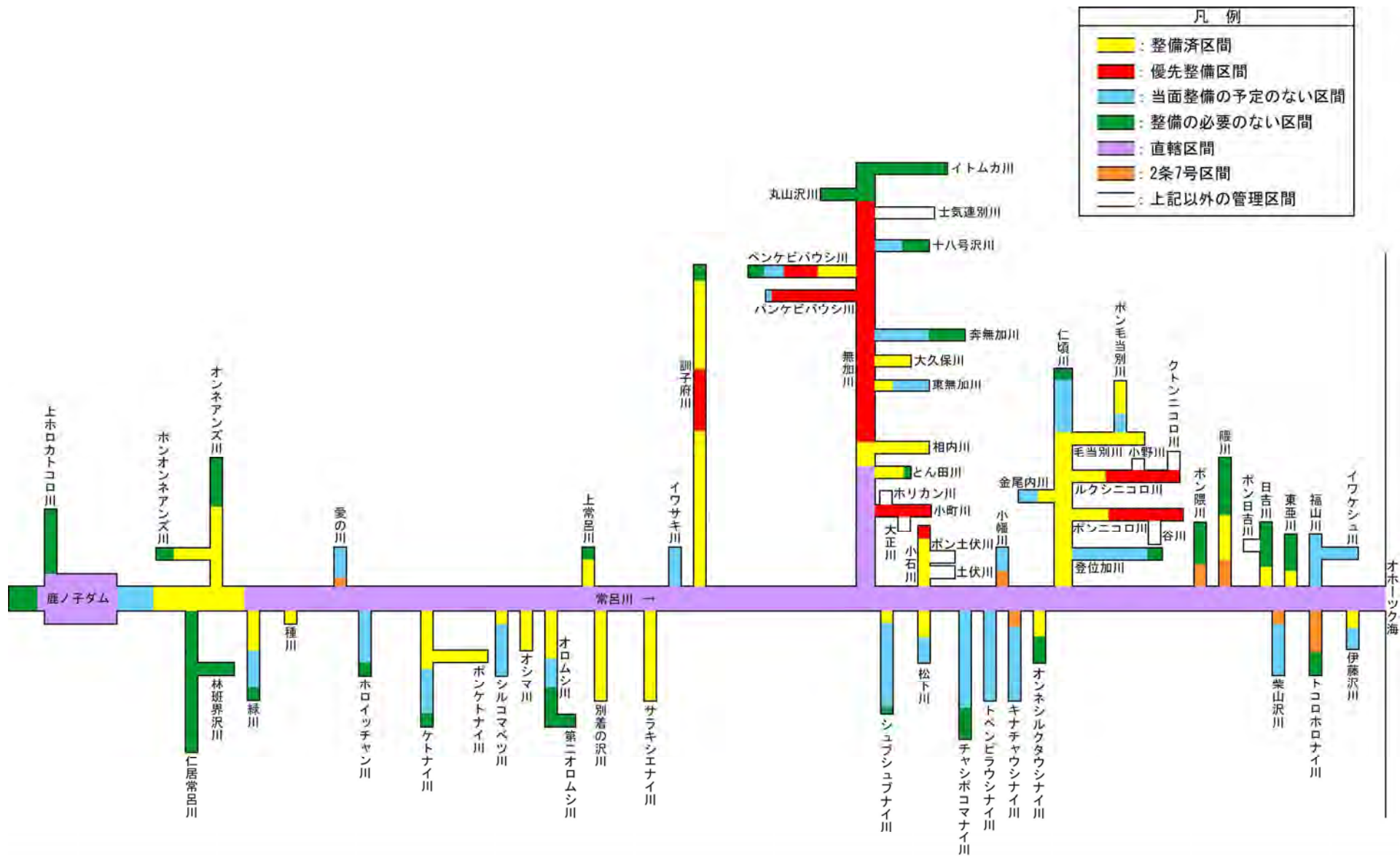


図2-1 河川整備の現況及び優先整備区間概略図

## 第2節 計画対象期間

河川整備計画の計画対象期間は、概ね30年の間とする。本整備計画は、現時点での流域の社会状況、自然環境、河道状況に基づき策定するものであり、策定後、これらの状況等の変化や新たな知見、技術の進歩等の変化が生じた場合は、必要に応じて見直しを行うものとする。

## 第3節 洪水等による災害の発生の防止又は軽減に関する事項

圏域の河川のうち、優先整備区間については、洪水の発生状況、氾濫区域内の資産状況、想定される被害の実態、現況の流下能力等を踏まえて、優先的に河川整備を行い、洪水から貴重な生命や財産を守り、地域が安心して暮らすことのできるように社会基盤の整備を図るものとする。また、圏域内の河川において、調査・点検の結果、所要の安全性が確保されていない堤防については、必要に応じて堤防強化対策等を実施する。

### (1) ポンニコロ川

ポンニコロ川においては、早期に治水安全度を確保するため、仁頃川合流点から松月橋下流地点までの6.1km区間において、平成18年10月に発生した洪水を踏まえ、沿川地域の農地への水害を防止することを目的に整備を進める。

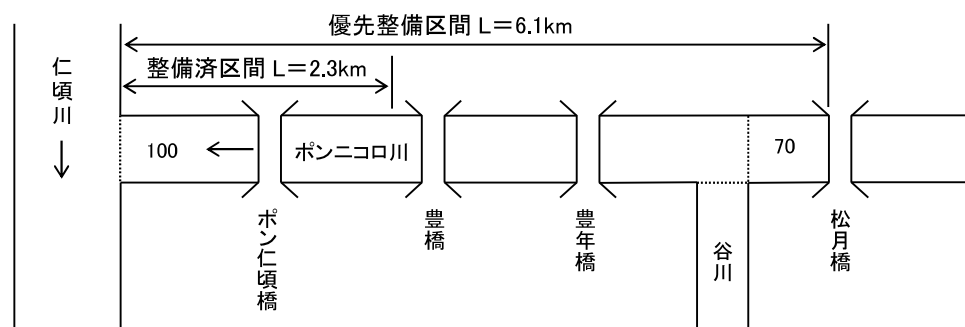


図2-2 ポンニコロ川整備計画流量配分図（単位：m<sup>3</sup>/s）



## (2) ルクシニコロ川

ルクシニコロ川においては、早期に治水安全度を確保するため、仁頃川合流点からクトンニコロ川合流点までの 5.6km 区間において、平成 18 年 10 月に発生した洪水を踏まえ、沿川地域の農地への水害を防止することを目的に整備を進める。

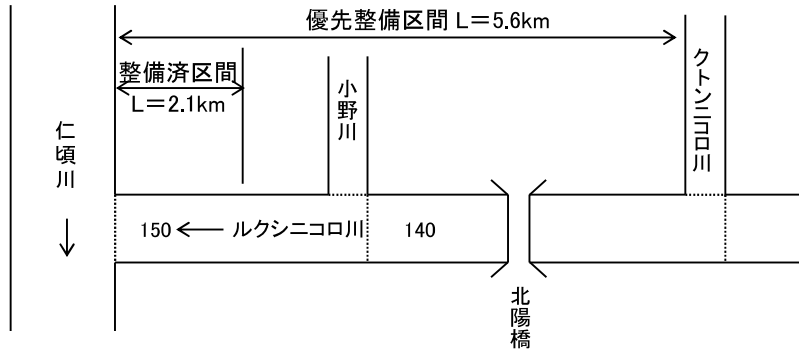


図 2-3 ルクシニコロ川整備計画流量配分図 (単位 :  $\text{m}^3/\text{s}$ )

## (3) 小石川

小石川は、下流に位置する北見市街地の資産集中区域に対し、早期に治水安全度を確保するため、トンネル河川区間上流から第 18 号橋までの 1.6km 区間において、昭和 61 年 8 月に発生した洪水を踏まえ、沿川地域の市街地や農地への水害を防止することを目的に整備を進める。

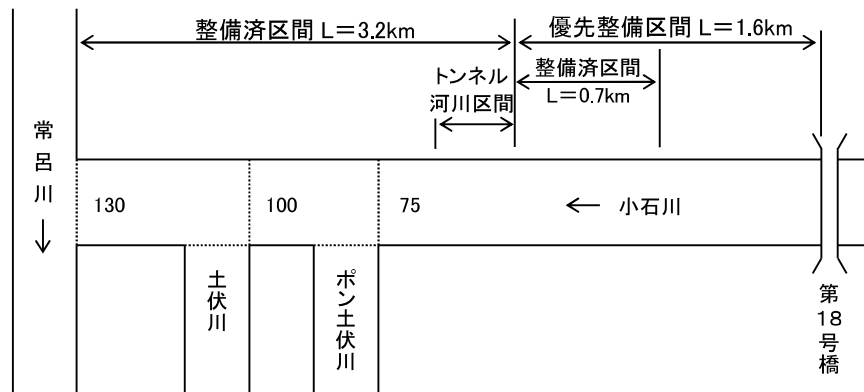


図 2-4 小石川整備計画流量配分図 (単位 :  $\text{m}^3/\text{s}$ )

#### (4) 無加川

無加川は、流域に留辺薬市街地、温根湯温泉等の資産集中区域や農業地帯を含んでいることから、社会的・経済的な重要性、想定される被害の大きさを踏まえるとともに、下流直轄区間との整合を図り、相内川合流点から滝の湯橋上流までの32.4km区間において、昭和37年8月に発生した洪水を踏まえ、沿川地域の市街地や農地への水害を防止することを目的に整備を進める。

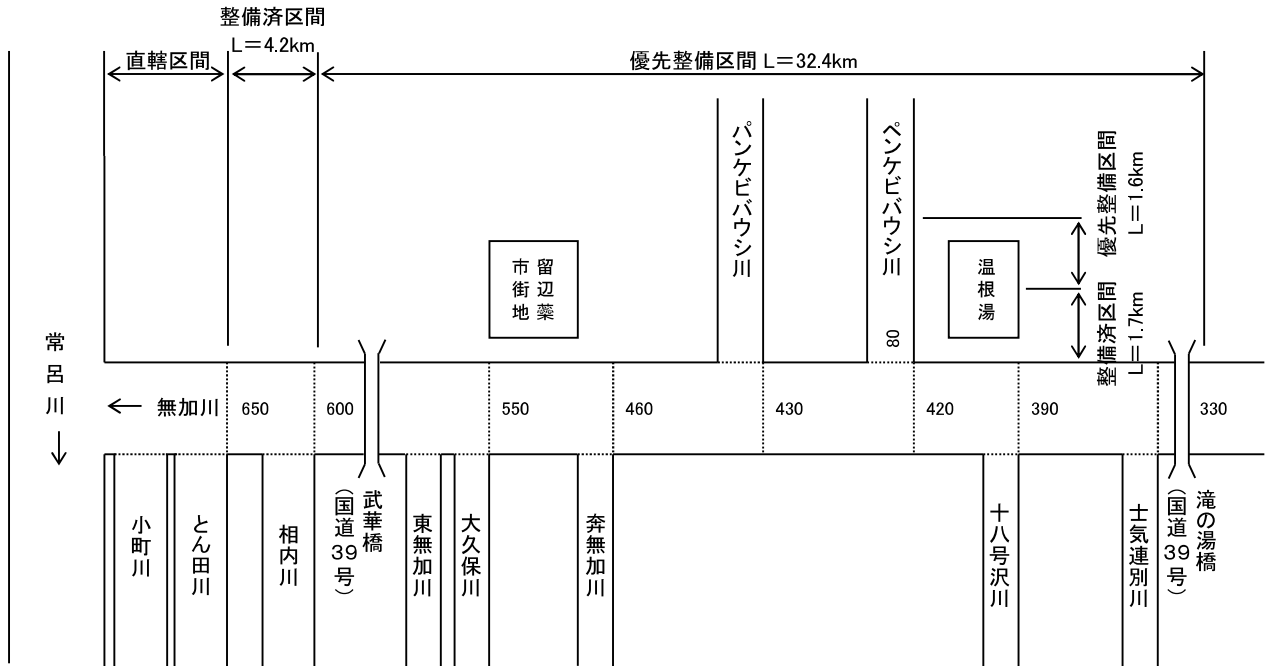


図 2-5 無加川整備計画流量配分図 (単位 :  $m^3/s$ )

#### (5) 小町川

小町川においては、下流に位置する北見市街地の資産集中区域に対し、早期に治水安全度を確保するため、無加川合流地点から川添橋上流までの4.8km区間で、市街地への水害を防止することを目的に整備を進める。

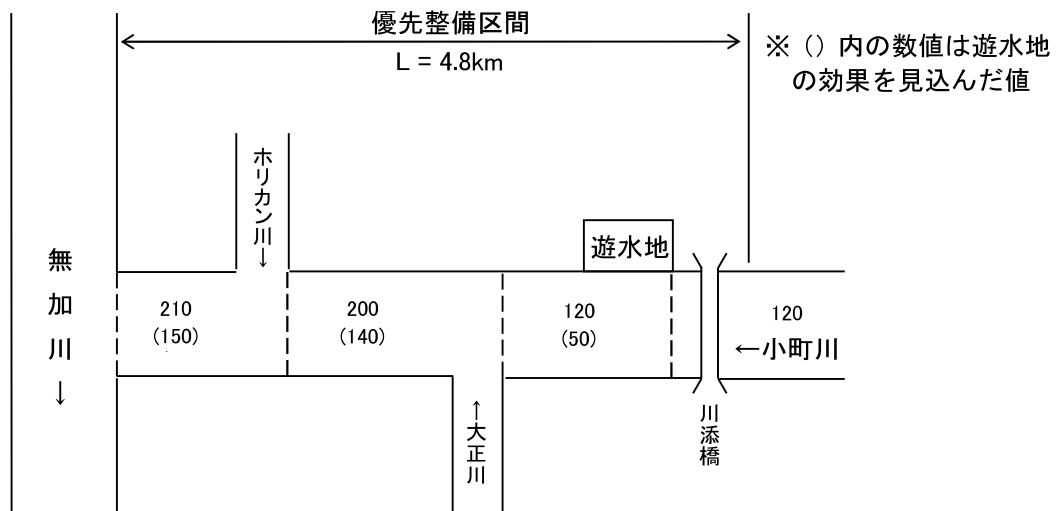


図 2-6 小町川整備計画流量配分図 (単位 :  $m^3/s$ )

### (6) パンケビバウシ川

パンケビバウシ川においては、早期に治水安全度を確保するため、無加川合流地点から門馬橋までの 4.3 km 区間で、沿線地域の農地の水害を防止することを目的に整備を進める。

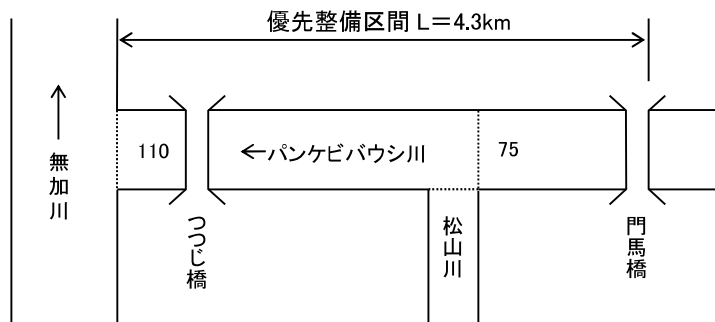


図 2-7 パンケビバウシ川整備計画流量配分図 (単位 :  $\text{m}^3/\text{s}$ )

### (7) ペンケビバウシ川

下流に位置する温根湯市街地の資産集中区域に対し、早期に治水安全度を確保するため、西通橋から南 1 線の無名橋までの 1.6km 区間において、昭和 50 年 8 月に発生した洪水を踏まえ、沿川地域の市街地や農地への水害を防止することを目的に整備を進める。

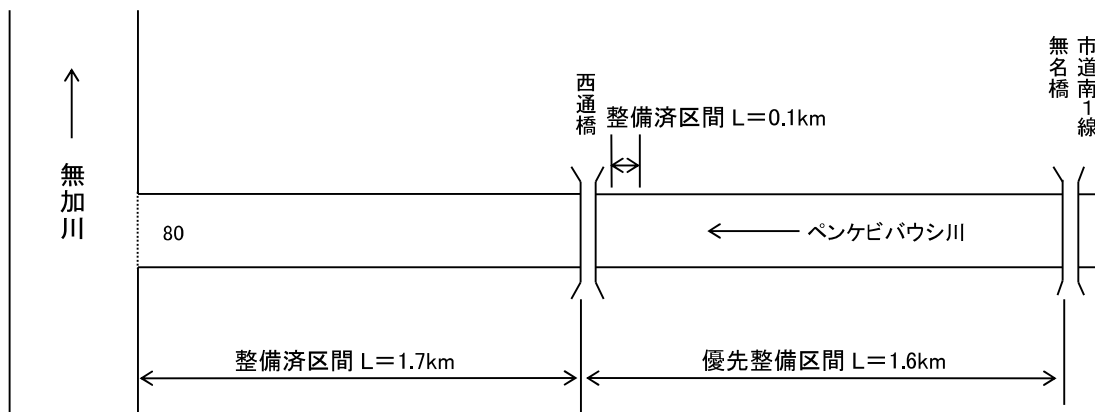


図 2-8 ペンケビバウシ川整備計画流量配分図 (単位 :  $\text{m}^3/\text{s}$ )

### (8) 訓子府川

訓子府川においては、早期に治水安全度を確保するため、弥生頭首工から仲の沢橋までの 6.2 km 区間で、沿川地域の農地の水害を防止することを目的に整備を進める。

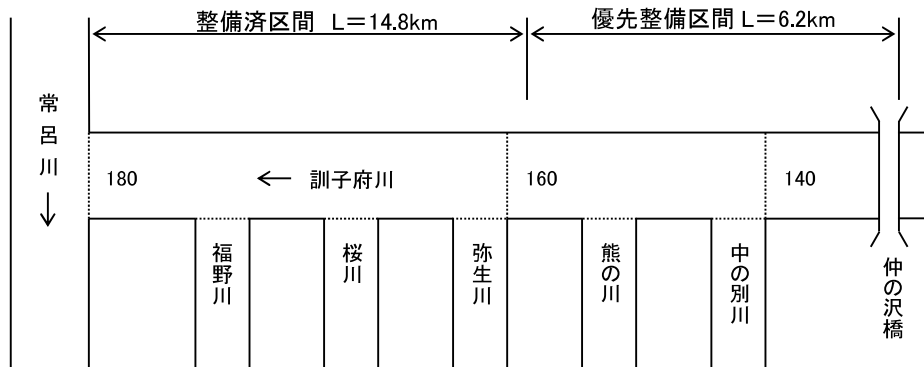


図 2-9 訓子府川整備計画流量配分図 (単位 : m³/s)